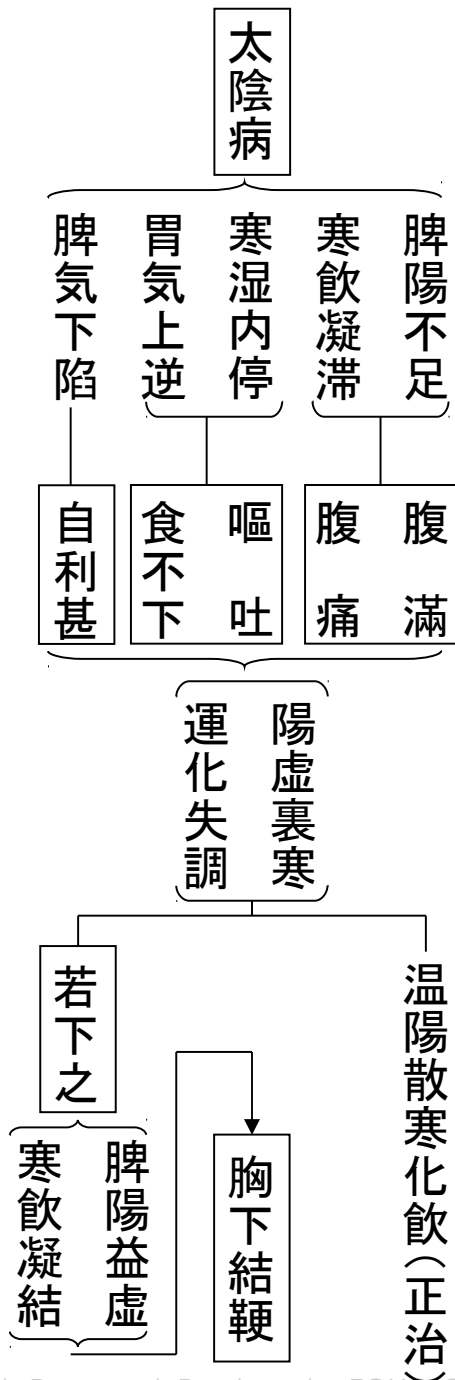


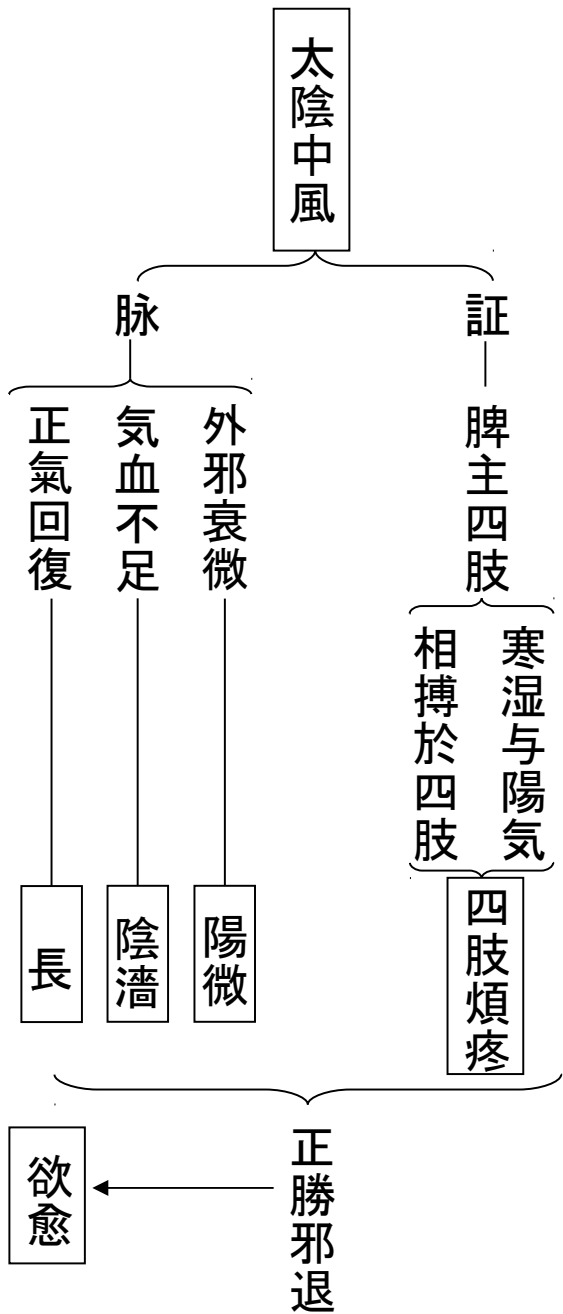
弁太陰病脉証并治

第二七三条 太陰之爲病、腹滿而吐、食不下、自利益甚、時腹

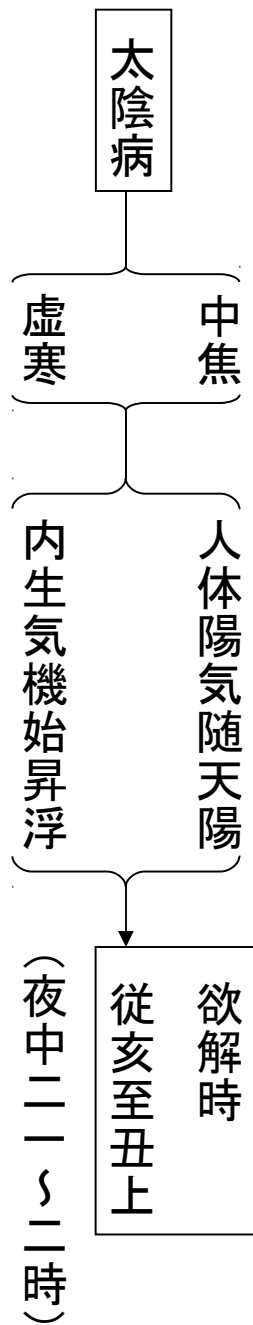
自痛。若下之、必胸下結鞭。



第二七四条 太陰中風、四肢煩疼、陽微陰濇而長者、爲欲愈。

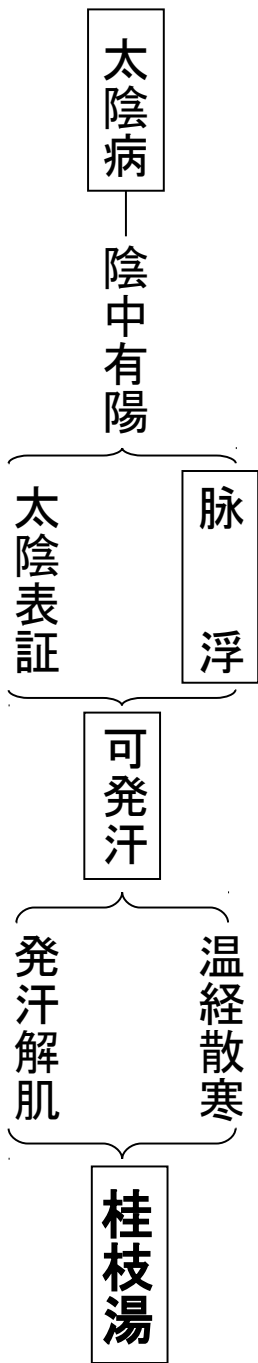


第二七五条 太陰病欲解時、從亥至牛上。



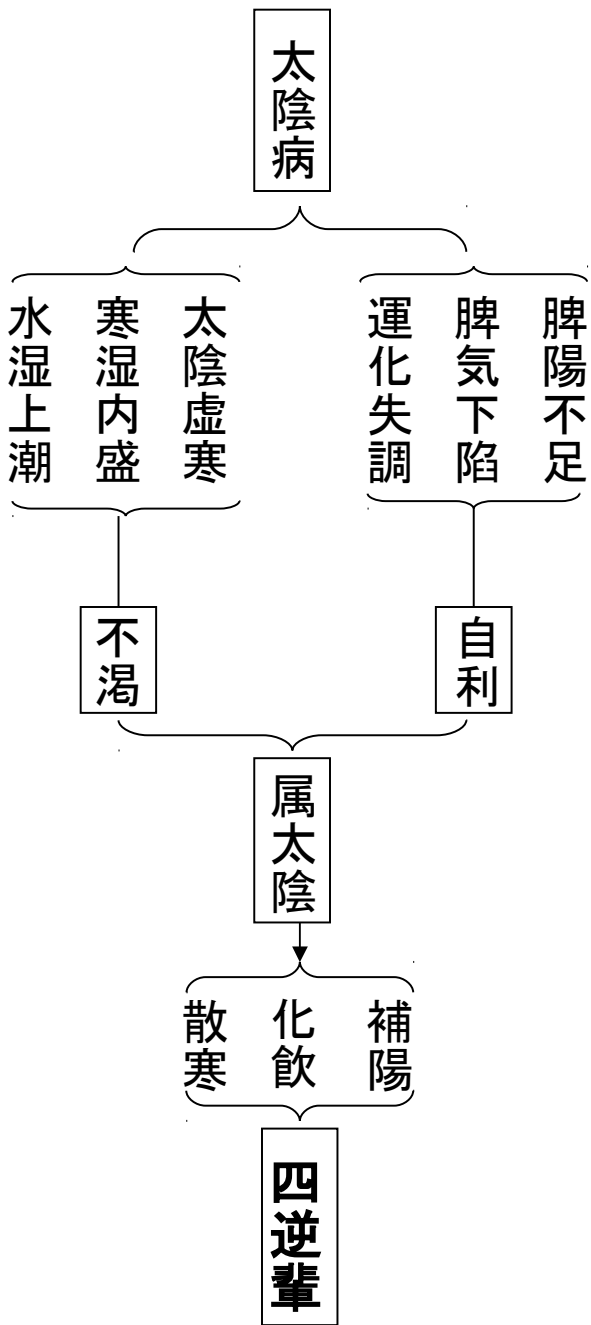
(昼夜気機昇降浮沈の法則に随う)

第二七六条 太陰病、脉浮者、可発汗、宜桂枝湯。



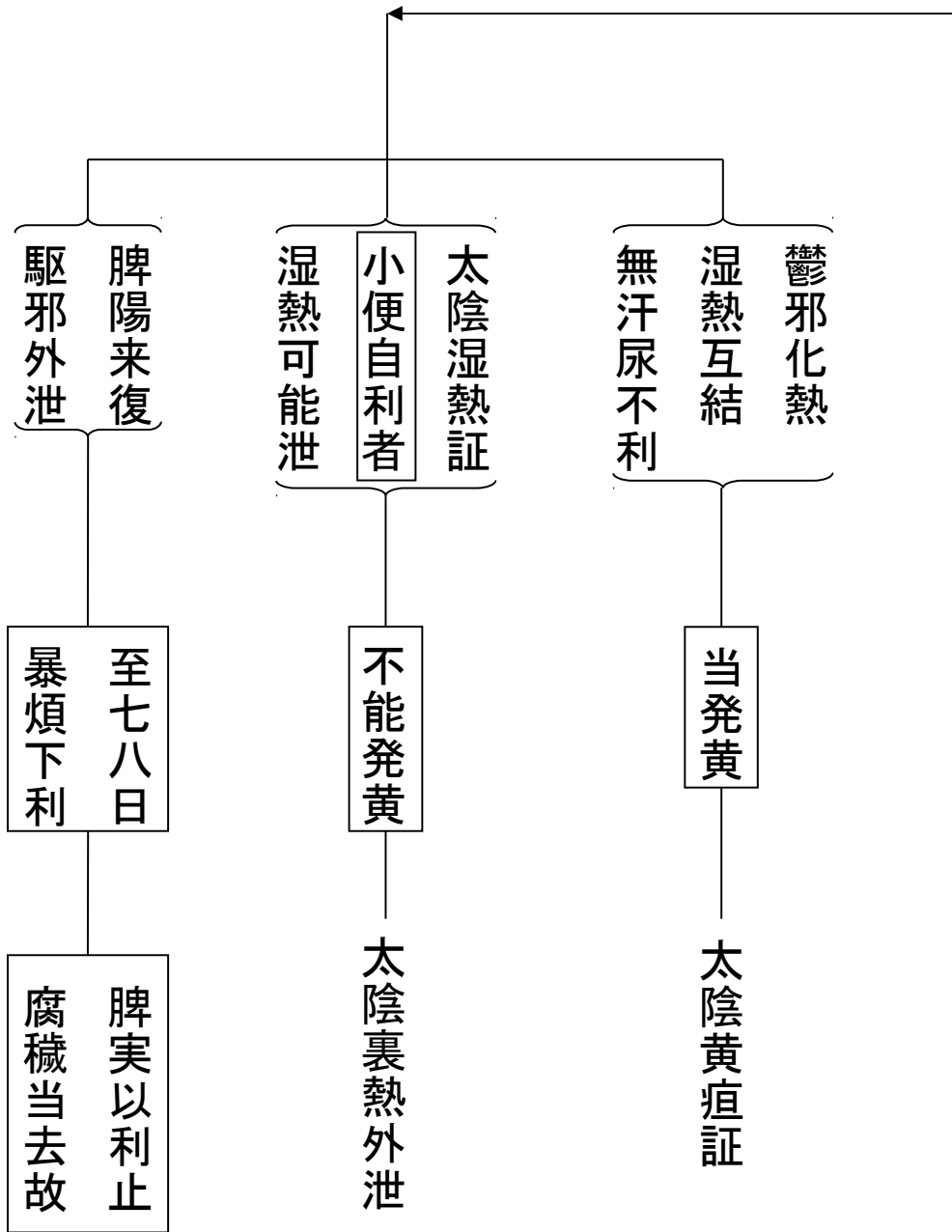
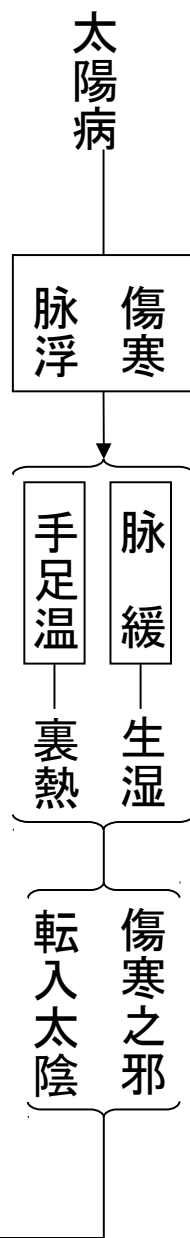
第二七七条 自利、不渴者、属太陰、以其蔵有寒故也、当温之。

宜四逆輩。



第二七八条 傷寒脉浮而緩、手足自温者、繫在太陰。太陰当發

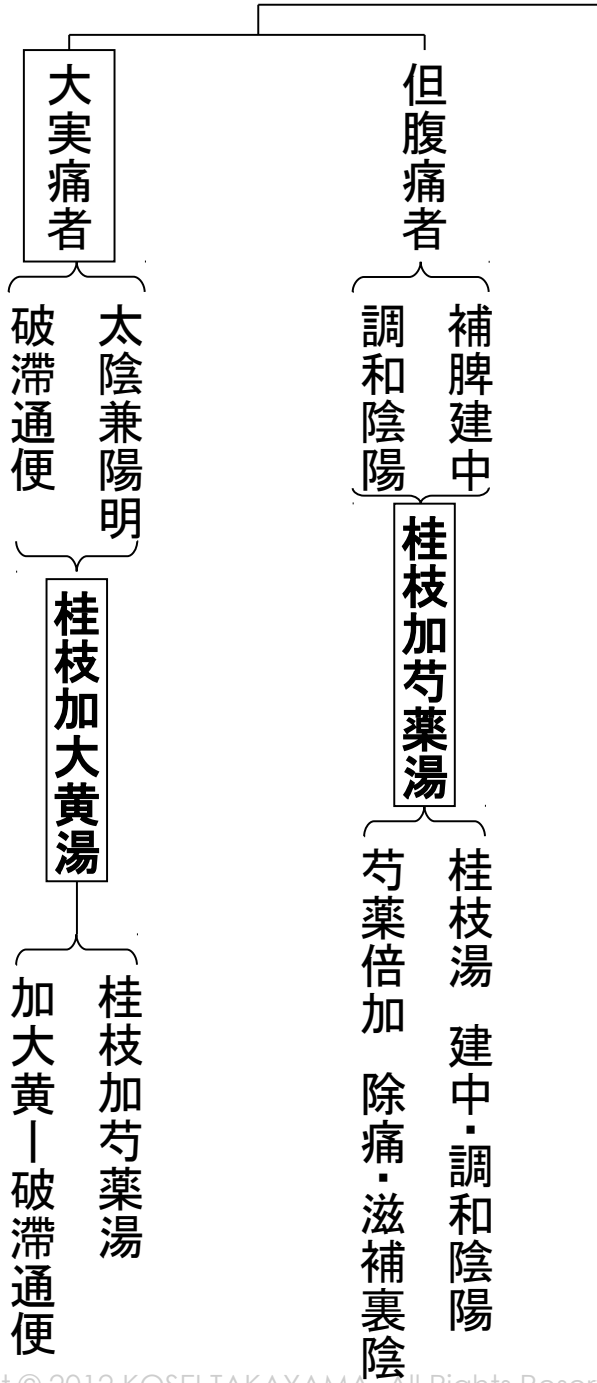
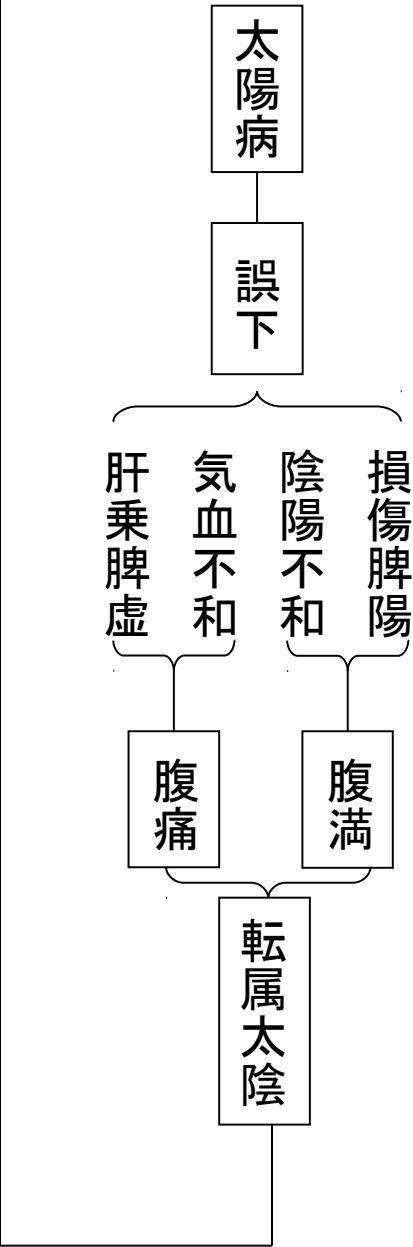
身黃。若小便自利者、不能發黃。至七八日、雖暴煩下利、日十余行、必自止。以脾家實、腐穢当去故也。



第二七九条 本太陽病、医反下之、因爾腹滿時痛者、属太陰也、

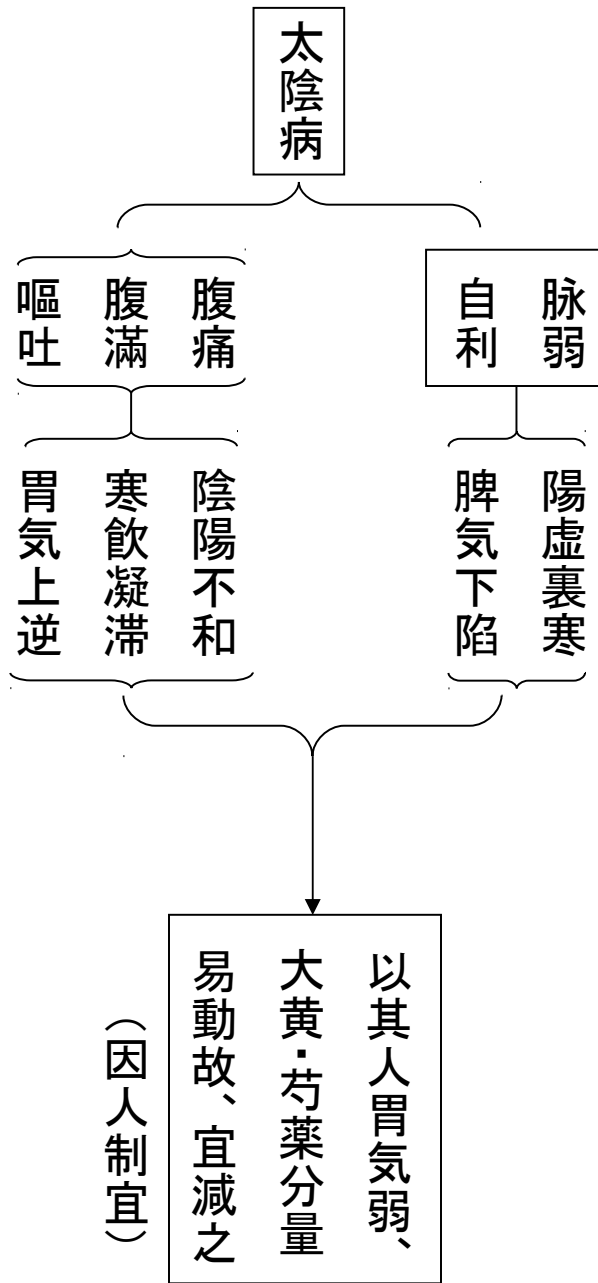
桂枝加芍藥湯主之。

大実痛者、桂枝加大黄湯主之。



第二八〇条 太陰爲病、脉弱、其人続自便利、設当行大黄、芍薬

者、宜減之、以其人胃氣弱、易動故也。



桂枝加芍薬湯の証*

方意

太陰病の主方、太陽病を誤下した結果、邪が虚に乗じて太陰脾に転属し、脾の陰陽気血の不和を来たしたために腹満し、時に腹痛を訴えるようになったものである。

太陰病の本来の証候は脾の虚寒と湿飲内盛に因る嘔吐、下痢、腹満腹痛であるが、本証は虚寒湿盛はなく、脾の陰陽不和である。

弁証のTrias

- 1) 腹満
- 2) 腹痛、便通異常
- 3) 腹皮拘急

舌は著変なし
脈は沈弦か弱

神経質の
傾向

腹部「平坦軟

腹皮拘急

(腹直筋緊張)

腹満腹痛

下痢軟便